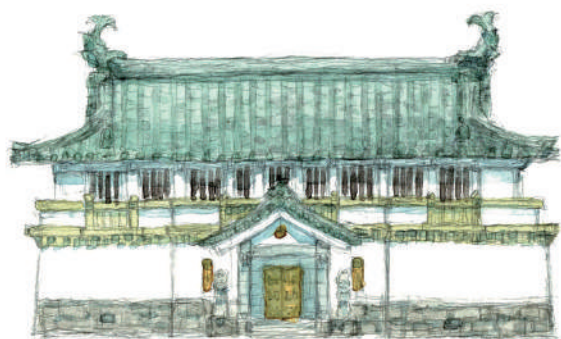


REGISTERED
TANGIBLE
CULTURAL
PROPERTY



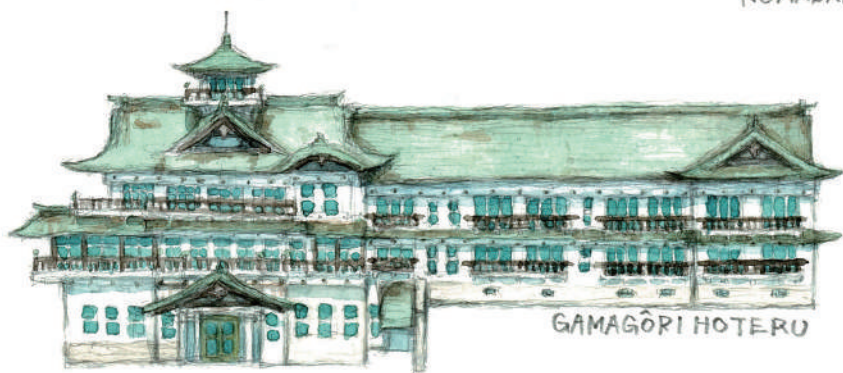
TOKUGAWA BIZYUTUKAN



NOMAYÛ BINKYOKU



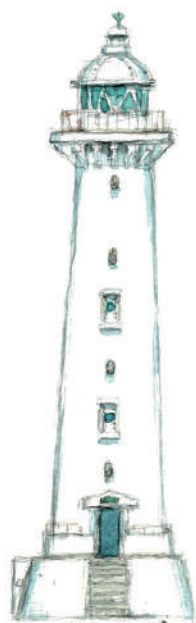
KYÛKAMOGINKÔ



GAMAGÔRI HOTERU

あ い ち の
A I T I N O
た て も の
T A T E M O N O
ま ち の シ
M A T I N O
ン ボ ル 編
S I N B O R U H E N

AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS,
GOVERNMENT OF JAPAN



NOMASAKI TÔDAI

あいちのたてもの

まちのシンボル編

愛知
登文会



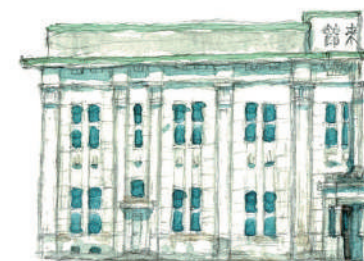
KYÛNAGOYAGINKÔ



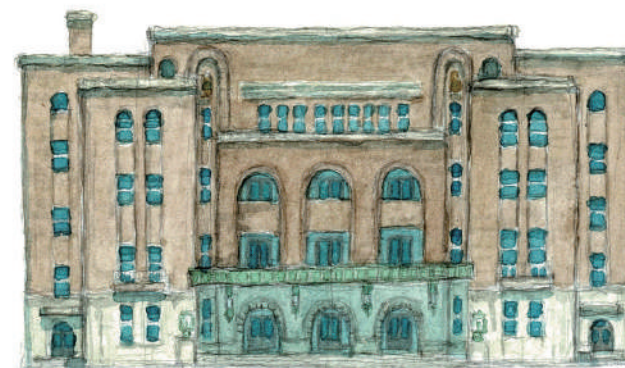
KYÛOKZAKI GIN KÔ



TOYOHASI KÔKAIDÔ



KYÛÔNOGINKÔ



NAGOYASI KÔKAIDÔ

愛知県
国登録有形文化財
建造物所有者の会

あいちの たてもの まちのシ ンボル編

絵と文 村瀬良太



あいちのたてもの
まちのシンボル編

MAP

- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| ① 蒲郡クラシックホテル本館(旧蒲郡ホテル本館) »p.12 | ⑨ 豊橋市公会堂 »p.44 |
| ② 徳川美術館本館 »p.18 | ⑩ 野間埼灯台 »p.46 |
| ③ 小弓の庄(旧加茂郡銀行羽黒支店) »p.24 | ⑪ 犬山城天守 »p.14 |
| ④ 野間郵便局旧局舎 »p.26 | ⑫ 名古屋市庁舎・愛知県庁舎 »p.16 |
| ⑤ 岡崎信用金庫資料館 »p.30 | ⑬ 昭和塾堂 »p.20 |
| ⑥ 大野宿 鳳来館(旧大野銀行本店) »p.32 | ⑭ 名古屋市市政資料館(旧名古屋控訴院) »p.28 |
| ⑦ 旧津島信用金庫本店 »p.36 | ⑮ 鶴舞公園 »p.42 |
| ⑧ 名古屋市公会堂 »p.40 | ⑯ 名古屋テレビ塔 »p.48 |

はじめに

はじめに

私たちのまわりには、
古めかしい洋館や、立派なお屋敷、歴史のある校舎に、
清楚な神社、荘厳な寺院や、可愛らしい教会、
そして大きなレンガの工場に、役割を終えた電波塔など、
年月を重ねた建物がごく自然にまちにとけ込んでいます。
そういった文化財として貴重な建物を、国登録有形文化財といいます。
日本には他にも、重要文化財や国宝などに指定された建物があり、
現在その総数は、1万6000件に上ります。
市指定・県指定のものを含めると、さらにその数は増えますが、
一方で、フランスの規定する歴史的記念物の4万6000件には遠くおよびません。
日本は文化的には、まだ発展途上なのです。

本書は、愛知県にある国登録有形文化財を中心とした
文化財建造物の魅力を紹介する本です。
今回は「まちのシンボル編」として、近世から近現代にかけて建てられた、公会堂など
の公共施設、またホテルや銀行、灯台など、多様な建物を取り上げています。
それらはすべて、あたりまえに残ってきたわけではありません。
多くの人々の努力で残されてきたものも少なくないのです。
そういった意味では、残された建物はすべて価値のある良い建築といえます。
そんな身近にある良い建築を知ること、
私たちのまちとその風景を大切に思う気持ちにつながってほしいと思います。
パリの美しい街並みも、フランスの人々がその重要性に気がつき、
建物と景観を大切に保存するまでに、多くの経験を積んできました。
この本が、建物とまちの歴史を知る一助になることを願っています。

もくじ

はじめに	2
愛知の建物、まちのシンボル編	4
【コラム】建物を楽しむために	10
◆和風のシンボル	11
蒲郡クラシックホテル本館(旧蒲郡ホテル本館)	12
【国宝】犬山城天守	14
【重要文化財】名古屋市政資料館(旧名古屋控訴院)	16
徳川美術館本館	18
【昭和塾堂】	20
【コラム】帝冠様式	22
◆洋風のシンボル	23
小弓の庄(旧加茂郡銀行羽黒支店)	24
野間郵便局旧局舎	26
【重要文化財】名古屋市政資料館(旧名古屋控訴院)	28
岡崎信用金庫資料館(旧岡崎銀行本店)	30

大野宿 鳳来館(旧大野銀行本店)	32
【登録文化財で昼食を】	34
津島市観光交流センター(旧津島信用金庫本店)	36
【コラム】建築家 鈴木禎次	38
◆新しいシンボル	39
名古屋市公会堂	40
【登録記念物】鶴舞公園	42
豊橋市公会堂	44
野間埼灯台	46
【重要文化財】名古屋テレビ塔	48
飯田喜四郎先生特別インタビュ	50
「帝冠様式に思うこと」	51
あいちのたてもの博覧会	52
国登録有形文化財とは	52
愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは	52



愛知の建物、 まちのシンボル編

はじめに

巷にあふれる旅行雑誌やガイド本には、まちのイメージをかたちづくる建物が必ずといっていいほど登場します。それらの建物は、まちの歴史や文化、あるいは時代を象徴する、そのまちのシンボリックな存在です。

この冊子では、そんな建物のうちでも、登録文化財を中心に取り上げ、歴史的背景と魅力について紹介しています。

また、まちのイメージに繋がる建物のデザインは、建築の歴史と深く関わっています。例えば、市役所の屋根が城郭の天守風になっていたりと、裁判所

や銀行が西洋建築のような外観になっているなど、シンボリックな建物のかたちには、そこにつながる歴史的な背景があります。

ここでは、そんなデザインの背景を紐解き、その変遷をたどりたいと思います。

和風の屋根

日本の建築を特徴づける大きなポイントに、屋根のかたちがあります。例えば、神社の社殿の屋根にのる千木や棟の上に並ぶ堅魚木は、古代の王の住まいをあらわすシンボルがデザインとして受け継がれたものと考えられています。

また瓦が葺かれた寺院建築も特徴的な屋根をしています。大きな屋根の棟先には鴟尾がのり、軒先がすつと反っている姿は日本独自の美しさです。とりわけシンボリックな存在の五重塔は、2500年前に入滅したブツダの遺骨を収めたストウパーという塚が原型となっています。最初はストウパーの頂上の小さな傘だったものが、徐々に大きな屋根になり、や

がて中国で五重塔へと姿を変えました。

天守と屋根

日本の建築の中でも特に印象深い屋根は、城郭の天守です。高い石垣の上に千鳥破風や唐破風が重なる華やかな外観は、まちの中でもひととき目を引く存在です。また屋根の頂上にいるシャチホコも重要な装飾の一つです。

屋根が重層する天守の登場は16世紀の初頭に遡ると考えられ、入母屋屋根の上に楼閣をのせた形状から「望楼型天守」と呼ばれています。犬山城天守はこの形式を残す日本で最古の天守です。

また、望楼型天守は織田信長が建設した安土城で大きく進歩したと考えられ、記録に残る華やかな天守の姿は、室町時代の鹿苑寺金閣などの楼閣建築に原型を求めることができます。

天守はその後、名古屋城や姫路城のような「層塔型天守」が誕生し、より高くて豪壮な姿は城下町のシンボルとなりました。



帝冠様式

これら日本建築の屋根のかたちが再び注目されたのは大正時代になってからで、明治以降に導入された西洋建築に代わる新しいデザインとして和風が求められたことに起因します。そのはじめは、大正4年の明治神宮宝物館のコンペと考えられ、和洋折衷のデザインは審査員の伊東忠太らによって推し進められました。

それが、名古屋城天守の屋根のかたちを模した名古屋市庁舎や愛知県庁舎、蒲郡クラシックホテル本館へつながり、また中国的な雰囲気漂う徳川美術館本館や寺院建築の意匠に範を求めた昭和塾堂のような建物のデザインを生み出す背景ともなりました。

これら和風の屋根が洋風の建物にのせられたデザインを「帝冠様式」と呼ぶこともあり、当時の日本が軍国主義を推し進めて東アジアを席巻し、世界の強国として頭角を表してきた時代の気分もあらわれています。

洋風のかたち

それより少し時代は遡って、江戸時代の終わりから明治にかけての日本は、先進的なヨーロッパ文明に追いつくため、さまざまな文物を盛んに取り入れました。その中でも洋風建築は、当時の町並みで異彩を放つ文明開化のシンボルでした。

そんな洋風建築ですが、本格的な西洋建築が導入される以前には、長崎や横浜、神戸などの居留地の洋館を真似た擬洋風建築が最初に広まりました。それらの多くは、大工によって設計されたため、洋風と和風が混ざり合った不思議なデザインをしています。擬洋風のデザインは、その後も長く残り、小弓の庄や野間郵便局旧局舎にその姿を見ることができます。

本格的な西洋建築とオーダー

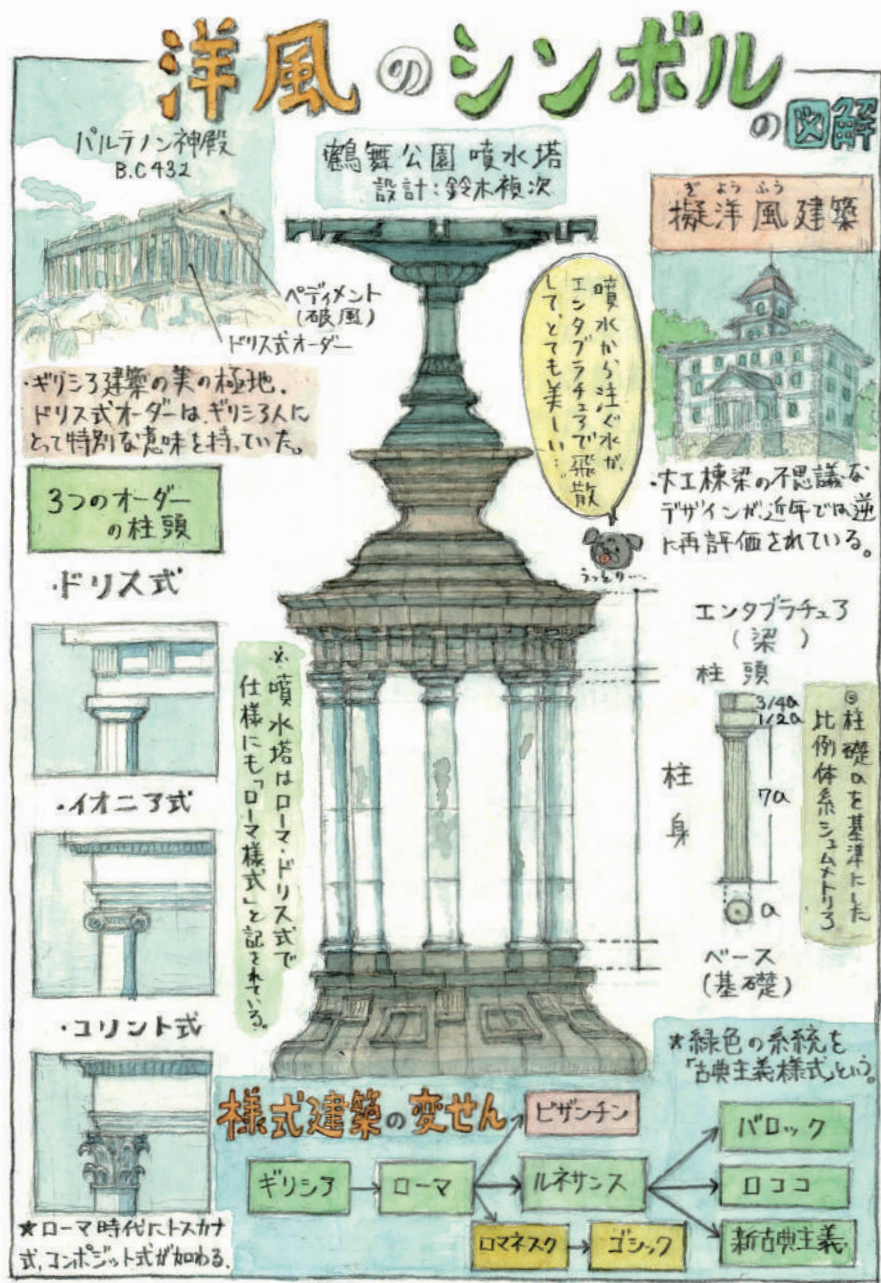
一方、明治10年に工部大学校（後の帝国大学。現在の東京大学）にイギリス人建築家のジョサイア・コンドルが就任したのを皮切りに、各省庁の招きでヨー

ロッパの建築家たちが来日し、本格的な西洋建築が伝えられました。

ところで、西洋建築の源流はギリシア建築に遡ります。中でも、柱と梁が均整のとれた姿になることを探求した「オーダー」と、その上にのるペディメント（破風）の組み合わせは重要なデザインの基点になります。

オーダーは、ドリス式とイオニア式、コリント式の3つの柱頭飾りに分けられ、また円柱の直径から全体の大きさを決めるシュムメトリアという比例の体系もつくり出されました。それら探求された美の到達点が、ユネスコのマークの元になったパルテノン神殿です。

ギリシア建築のオーダーは、その後ローマ建築に受け継がれ、ヨーロッパ各地に広がり、コロッセオなどの巨大建築の装飾として用いられました。またローマ帝国崩壊後は、ビザンチン建築やロマネスク建築などに変容を遂げ、後者はゴシック建築を生む素地となりました。



ルネサンス建築と様式の誕生

15世紀のイタリアのフィレンツェで、ローマ建築を調査・研究することでオーダーが再解釈され、ルネサンス建築が誕生します。この様式がヨーロッパ各地へ広まり、国や時代によりバロック様式や、ロココ様式、新古典主義様式などを生み出し、発展を遂げました。

帝国大学を卒業し、ヨーロッパに外遊した建築家鈴木楨次は、鶴舞公園噴水塔や岡崎信用金庫資料館をルネサンス様式にのっとったデザインで設計しました。また名古屋市政資料館は、ドイツの建築家エンデとベックマンが伝えたネオ・バロック様式の流れを汲む建築です。

その一方で、明治後期ごろからは、それら様式建築にヨーロッパで新たに登場したセセッションやアール・デコなどを混ぜ合わせたデザインがあらわれ、大野宿鳳来館や津島市観光交流センターにその姿を見ることが出来ます。

新しい技術と新しいかたち

18世紀のヨーロッパでは、産業革命と共に発展してきた蒸気機関に合わせて、鋼材を用いた技術が急速に発達してきました。鉄道はその象徴ともいえる存在で、川を渡る鉄橋の建設は、後にエッフェル塔のような高層建築の誕生を促しました。

また同じ頃には、新しいセメントの開発や、コンクリートと鉄筋の骨組みを混ぜ合わせた鉄筋コンクリートの技術が登場し、徐々に建築へも応用され始めていました。それら新技術がもたらした最大の特徴は、建物の大きさでした。

そんな新しい技術の登場で、様式建築は次第に時代にそぐわないデザインとみなされるようになり、それに変わる新しい様式がヨーロッパ各地で探求され、さまざまな芸術運動として花開きました。

名古屋市公会堂は、ドイツで登場したポリウム感のある表現主義に倣ったデザインで、豊橋市公会堂はアメリカで流行したスパニッシュ様式とネオ・ロマネスク様式のデザインが取り入れられています。

いずれも新しい様式を取り入れつつ、鉄筋コンクリートや鉄骨などを用いた大規模な建物が、新たなまちのシンボルとして建てられました。

おわりに

古来より、まちのシンボルとなるような建物には、二つの側面がありました。一つは権威の象徴として、もう一つは信仰の象徴としてです。

戦後、集約電波塔の機能と観光タワーの目的で建設された名古屋テレビ塔は、そんな従来の枠を超えた新しいまちのシンボルとして、東京タワーや通天閣などの建設を牽引しました。

また近年、戦後に建てられた近現代の建物と合わせて、野間埼灯台のような土木構築物についても評価が高まっています。

建物には、そんなまちのシンボルとしての資質が備わっていて、今もその価値が見出されるのを待っています。

新しいシンボルの

★鉄とコンクリートが新しい建築の時代を切り開いた

パリのエッフェル塔

1889年のパリ万国博覧会で建てられたエッフェル塔は、鉄橋の技術も応用した画期的な建物だった。



設計者 G・エッフェル

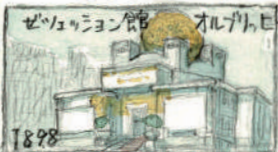
新しい様式たち

ドイツ表現主義

ドイツ工作連盟博覧会 劇場
V・D・ヴェルト



1914



1898

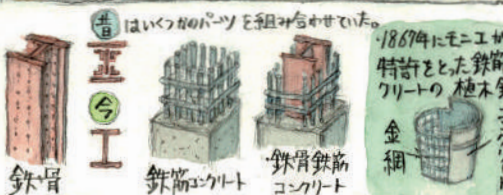
・アール・デコ



1930

★この他に未来派やデスティーユなども登場し、インターナショナルスタイルへの道を開いた。

鉄骨と鉄筋コンクリートと鉄骨鉄筋コンクリート
RC SBC



鉄骨

鉄筋コンクリート

鉄骨鉄筋コンクリート

金網

1867年にモニュメントとして建設された名古屋テレビ塔の鉄骨と鉄筋コンクリートの構造

2020年、地表スレスレに設置された防災装置（ハロワート工法）

名古屋テレビ塔は難しい条件をデザインに昇華させた純粋に構造と機能に即した美しいモダンな建造物なのだ！



名古屋テレビ塔

建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物を見るだけで楽しいものです。旅先や、いつもの街並みの中で良い建物を見つけた時は、まるで大切なたからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれですが、あえてガイドラインを紹介するのなら、まずは建物の周りの状況を眺めてみてください。なぜそこにその建物がたっているのかを、道路や街並みをヒントに探ってみましょう。

それから、建物をじっと見つめて、建物に漂っている雰囲気をじっくり感じてみましょう。もし上手いかない時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。なんとなく感じていた雰囲気は、色味が理由かもしれませんし、細部に施された装飾が原因かもしれません。

雰囲気を味わえるようになったら、建物のたどってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。年代や様式、デザイン、構造の種類などの知識があれば、より鮮明に想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物を大好きになっていけば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【まちのシンボル】

実は、数ある文化財建造物のすべてが、まちのシンボルとしての性質を備えています。逆にいえば、定まったかたちがないのが面白さといえるかもしれません。

ただ、シンボルとなり得る建物の背景には、必ずといっていいほど、そこに関わった人々のドラマがあります。例えばそれは、外観の特徴的なかたちに、それを選んだ人々の思いが詰まっていたり、あるいは取り壊しの危機に瀕した建物を残すため、がむしゃらに努力した人々のエピソードが秘められていることもあります。

そういったドラマを、残された資料や関係者から伺えれば、建物の存在をより感動的に味わうことができるでしょう。

【建築マニアの嗜み】

建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には建物へのいたわりの心を持って、大切に扱いましょ。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができ、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

和風のシンボル

日本建築史の中で、まちのシンボルとなり得る

大きな建物に転用できるデザインを過去から見出そうとした時、
城郭の天守に行き着いたのは必然だったのかも知れない。

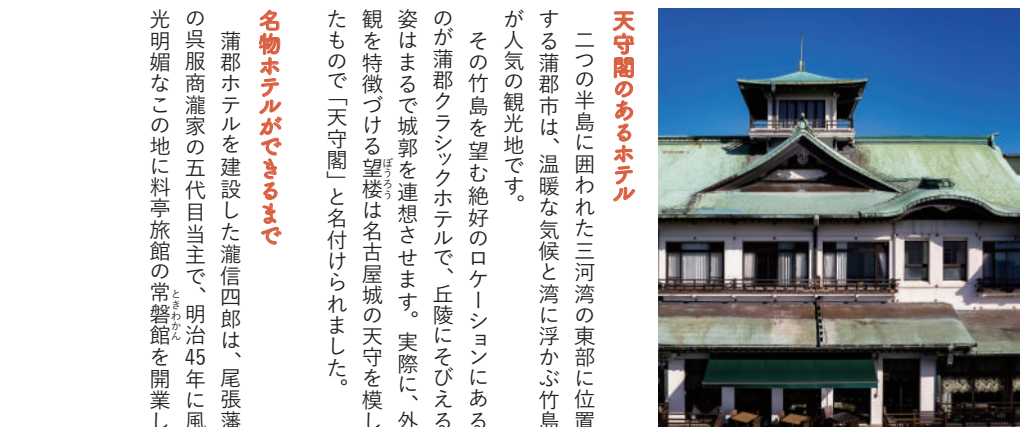


photo: Hitoshi Kumamoto

ホテルの鳥瞰。丘陵に沿った建物に城郭風の屋根ののる外観が木製の手すりと調和している

蒲郡クラシックホテル本館(旧蒲郡ホテル本館)

風光明媚な観光名所にそびえる、城郭風の名物ホテル



名古屋城天守を模した「天守閣」

天守閣のあるホテル

二つの半島に囲われた三河湾の東部に位置する蒲郡市は、温暖な気候と湾に浮かぶ竹島が人気の観光地です。

その竹島を望む絶好のロケーションにあるのが蒲郡クラシックホテルで、丘陵にそびえる姿はまるで城郭を連想させます。実際に、外観を特徴づける望楼は名古屋城の天守を模したもので「天守閣」と名付けられました。

名物ホテルができるまで

蒲郡ホテルを建設した瀧信四郎は、尾張藩の呉服商瀧家の五代目当主で、明治45年に風光明媚なこの地に料亭旅館の常磐館を開業し

ました。やがて現在の名鉄蒲郡線が開通する昭和4年ごろには、常磐館を含む一帯が観光地として人気を博します。

ちょうどその頃、外国人観光客の誘致を目的として鉄道省に国際観光局が新設され、大蔵省からはホテルの新設費が融資されることになり、その斡旋を受けて蒲郡ホテルが誕生しました。

また観光局からの要望で、ホテルの外観には和風の意匠が求められ、千鳥破風や唐破風が重層し望楼ののった特徴的な姿となりました。



ロビー内観。木調の内装が美しい

ディテールの巧みさ

蒲郡ホテルは戦前のホテルブームの先駆けとして全国に名を知られ、建築家のブルーノ・タウトをはじめ多くの著名人が訪れました。

蒲郡ホテルを訪れて感じるのが、いわゆる言い難い品格の良さです。建物は外観の印象よりもコンパクトにまとまっていて、和風のデザインが所を得て巧みに収まっています。

それらを引き締めているのが木造のディテールで、屋根の軒下の垂木や、窓周りに配された手すり、入口で客を迎える車寄せの木組みや天井などが、鉄筋コンクリート造の建物に違和感なく組み込まれています。

また丘陵の高低差を利用したフロア計画も見事で、正面入り口のある1階と客室のある2階、地下階の宴会場はそれぞれ和風の庭園に開かれていて、スムーズに外部空間と接続されています。

蒲郡のシンボル

車寄せの真鍮製の扉をくぐると、木調のロビーが広がり、吹き抜け天井の漆喰細工やレトロなエレベーター、立派なマントルピースに迎えられて、上等なしつらえに胸が高まります。



地階松の間のテラス。タイルに注目

1932年(昭和9年)
鉄筋コンクリート造4階建て小屋組は鉄骨造。屋根は木造
「設計」久野節「実設計」村瀬國之助
蒲郡市竹島町15-1
<https://gamagori-classic-hotel.com>

国宝 犬山城天守

日本建築のベスト・オブ・シンボル



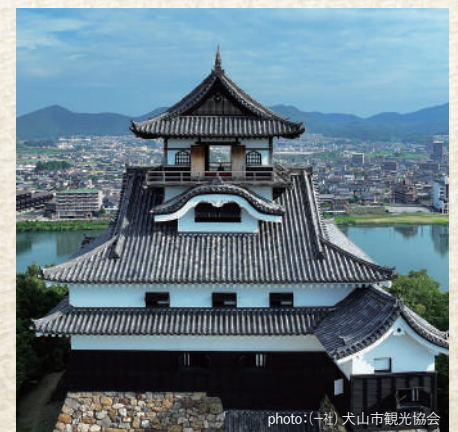
天守外観。大壁の漆喰の白、下見板の黒、石垣の橙色の配色が美しい

最古の天守

日本建築の中でも、まちのシンボルとして最も親しまれてきた建物はお城の天守でしょう。幾重にも重なった屋根に立派なシャチホコ、どっしり構えた天守の姿は、まちの中でもひととき目を引く存在です。

現在、全国各地には天守を備えたお城が100近くあり、そのうち近世に建設された天守は12城現存しています。

その中でも犬山城は、直下に迫る木曽川のダイナミックなロケーションや城下町からの眺めの良さ、そして何より天守の美しいたたず



望楼外観。棟には約1.2mのシャチホコがのる

まいから、指折りの名城に数えられます。

城下町のメインストリートである本町筋を歩くと天守が見えるとともに、登録文化財の町家や、若者に人気のスイーツのお店などが軒を連ね、多くの観光客で賑わっています。

異例の望楼

針綱神社の鳥居をくぐり、大手道を登った先の本丸にたどり着くと、橙色がかったチャート石で積まれた天守台石垣の上に、三層の屋根で構成された天守が鎮座しています。

つぶさに見てみると、大きな入母屋屋根の上に望楼がのっていることがわかるでしょう。これは望楼型天守といい、名古屋城のような層塔型天守より古い形式のものです。

望楼には廻縁が巡り、大きな扉の両脇には花頭窓があしらわれています。またその下の唐破風が外観に豊かな表情を与え、手前に突き出た附櫓がわずかに外に開くことでおおらかさも感じられる、とても美しいたたずまいとなっています。

特筆すべきは望楼の廻縁で、幅90cmの回廊は外に出ることができ、そこからは江戸時代と変わらぬ素晴らしい眺望を体感することができます。これは、かつて城主だった成瀬家の人々が今も天守を維持管理し続け、行政と力を合わせて運営されているからで、他にはない大きな特徴です。

最新の研究とお城ブーム

実は犬山城天守は、長い間、入母屋屋根の部



軸組模型。天守の構造がよくわかる

分が先につくられ、望楼はその後に増築されたと考えられてきました。ところが最近の調査で、ほぼ同時期に伐採した部材が使用されていることがわかり、一度に全体をつくった後で唐破風や廻縁を含む改築が行われたとする説が有力となり、定説が覆されました。

国宝犬山城天守は、観光資源としてのまちのシンボルというだけでなく、新しい研究が進められる文化財のシンボルとしても、ますますその価値を高めています。

最後に隠れた見どころをご紹介します。それは天守2階にある精巧な軸組模型です。昭和の大修理の折に製作されたもので、天守の複雑な構造がよくわかる、お城マニアにとってたまには垂涎ものの宝です。

重要文化財 名古屋市庁舎と愛知県庁舎

名城エリアに並ぶ、城郭風デザインの庁舎建築



名古屋市の正面外観。タイルを使用した表現主義的な建物に和風の屋根の塔屋が伸びる
photo: Hitoshi Kumamoto/Hisao Takeuchi/Ryota Murase

それら帝冠様式の庁舎が二つ並ぶ姿は他になく、時代や場所などの歴史的背景を感じさせる、貴重な景観となっています。

名古屋市の庁舎

名古屋市の庁舎の特徴的な外観はコンベで募集されたもので、重層する屋根の塔屋がのった案が採用されました。塔屋の頂上には四方をにらむシャチホコが置かれ、銅板ぶきの屋根とあわせて、名古屋城の天守を思わせるデザイン

となっています。

一方、館内も見どころが満載です。玄関ホールには、大理石がふんだんに用いられた立派な階段が待ち構え、手すりには陶製の灯籠が緑色の光をたたえています。

階段を上って中央廊下を進むと議場があり、その壁面には美しいタイルの装飾があります。この場所にはかつて、市議会議員たちの社交の場でもあったそうです。

他にも、浅葱色の美しいタイルが貼られた貴賓室付属の化粧室や、5階まで吹き抜ける階段なども見応えがあります。

愛知県の庁舎

もう一方の愛知県庁舎は、入母屋屋根に千鳥破風のついた塔屋が三方にあり、より名古屋城の天守を感じさせる外観となっています。緑青色の屋根が、オレンジ色のタイルの建物にのる姿は、ひときわ華やかに感じられます。これらタイルの使用は、陶磁器産業で栄えた愛知県を表すデザインでもありました。

館内に入ると、意外とすっきりした玄関ホールに驚くかもしれません。愛知県庁舎は機能性に重きを置いていて、隣接する名古屋市の庁舎と比べると、その違いは顕著で



貴賓室に付随する化粧室。浅葱色の美術タイルが美しい

2棟の帝冠様式の庁舎

名古屋城エリアには、悠然とたたずむ立派な庁舎が2棟たっています。一つは名古屋市の庁舎、もう一つが愛知県庁舎で、どちらも昭和初期に建てられた鉄骨鉄筋コンクリート造の大きな建築です。

両者に共通しているのが、屋根に和風のデザインが取り入れられていることです。これは、設計に際して和風を意識することが求められたためで、このようなデザインを「帝冠様式」と呼ぶことがあります。



中庭を見る。迫力のあるダイナミックな空間

す。その分、シンプルさがダイナミックな空間を生み出し、中庭側の眺めはとも迫力があります。

また内部空間については、2階の議場が見事で、正面演壇のアーチと和風の円柱、また折り上げ格天井の上の大きなトップライトなど、スケールの大きな設えとなっています。

名古屋市の庁舎と愛知県庁舎は、ともに1998年に登録文化財となり、2014年には重要文化財に指定されました。それを推し進めたのは、市と県による合同のプロジェクトチームでした。

立派な庁舎が並ぶ風景は、そこで働く人々によって守られ、今も大切に使用されています。



photo: Hisao Takeuchi / Hitoshi Kumamoto

城郭を思わせる外観。手入れされた庭に緑色の釉薬による屋根瓦が美しい。車寄せ脇には文官石像が立つ

徳川美術館本館

尾張徳川家のコレクションを収蔵する帝冠様式の美術館



瓦と同じ焼き物でできたシャチホコ

歴史と由緒ある私立美術館

名古屋城から東へのびる「文化のみち」エリアには、名古屋市庁舎や愛知県庁舎、名古屋市政資料館などの近代建築が残り、その終点には日本文化の至宝とも呼べるコレクションを収蔵する徳川美術館があります。

美術館のある徳川園一帯は、かつては尾張徳川家の名古屋本邸で、戦前まで江戸初期の遺構や明治中期に建設された大書院などが残されていました。その敷地の一角に建てられたのが徳川美術館本館で、邸内の建物との調和が図られた結果、「和洋折衷の「帝冠様式」が採用されました。

本館のたたずまい

現在、美術館へは新館正面に至る黒門からアプローチするため、本館が人目に触れるこ

とは少なくなりました。ただ、敷地南側に回ると、緑釉の瓦をのせた塀の先の門扉ごしに、城郭風の本館を見ることが出来ます。

白い外壁の上には高窓があり、以前は電動回転式のルーバーとなっていて、館内の光を調整する役割を果たしていました。屋根には塀と同じ瓦が葺かれ、屋根面が広いいため、いっそう色合いの美しさが目をひきます。また棟の両端には瓦と同素材でつくられたシャチホコものつています。



展示室の格天井。球状の照明器が釣られている

この城郭のような外観は、どこか中国的な風情も感じられます。それは、尾張徳川家藩祖の義直が傾倒した儒教的な中国趣味が意識されたと考えられ、他の帝冠様式の建物にはない艶やかさが漂っています。

車寄せから中へ入ると、玄関ホールには壁と床に象嵌細工が施され、美しい空間となっています。普段、この入口は閉じられていますが、特別展の開催時には内側から見学することが出来ます。

展示空間についても少し触れましょう。広々とした空間には格天井に支輪が巡り、装飾豊かな照明器が4基釣られています。また展示ケースは長押しが高低差をつけてリズムカルに配置され、和風の設えが近代風にアレンジされています。

帝冠様式に至る背景

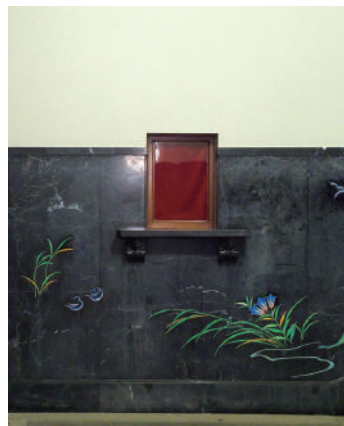
徳川美術館の構想は十九代徳川義親によって進められました。文化的・歴史的価値の高い美術品が散逸することなく保存されたのは、この時の英断によるものです。

義親は、東京国立博物館を帝冠様式で設計した渡辺仁と同級生で、徳川美術館設計コンペの際には渡辺を審査員として招いてい

ます。実施設計はコンペ案をもとに懇意の建築家吉本與志雄があたり、その際に渡辺の意見も求められたと考えられます。

政治的ニュアンスで語られがちな帝冠様式ですが、背景を読み解くと尾張徳川家の美術館としてふさわしいデザインだったことが分かります。

よく手入れされた前庭から外観を眺めた時、けれん味のない姿に静かな感動を覚えます。世界的なコレクションを収蔵するのに相応しい美術館です。



本館玄関ホール壁面の色タイルによる象嵌装飾

1935年（昭和10年）
鉄骨鉄筋コンクリート造平屋建て地下一階
〔原案〕佐野平一、〔実施設計〕吉本與志雄
名古屋市中区徳川町1017

昭和塾堂

城山八幡にそびえる、巨大な和風建築



photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

昭和塾堂の鳥瞰。平面計画・立面ともに「人型」であることが分かる。

特異点としての背景

昭和塾堂の特異性は、時代的背景とも深く関わっています。この建物は元々、青年団の教育施設として建設されました。青年団とは、ムラに存在した若者の教育機関を前身に持つ組織で、明治後期ごろに全国で創立されました。

一方で、青年団は八紘（はつしゅう）一宇（いつう）の気分とも同調し、訓令には陸軍の意図が強く反映されたといえます。そして大正14年には全国組織が結成され、その発団式は名古屋で開催されました。それが起因となり、昭和塾堂の建設は愛知県が担当し、全国的に見ても異例の規模の建物が出来上がったと考えられます。

謎めいたデザイン

この建物を設計した愛知県宮内課のメンバーは、昭和塾堂の設計にあたり、奈良や京都の社寺仏閣や教会堂などを見学に行ったと伝わっています。

外観を詳細に見ると、塔頂部の装飾は五重塔上部の相輪（さうりん）のようでもあり、また建屋の棟の先には鴟尾（しび）がのり、軒の先端が反っていることなど、仏教建築的な意匠が散見できます。

ただ一方で、軒下の垂木（たるぎ）が壁面の柱型と整合が取れておらず、平面計画と外観のデザインの調整に苦労したようすも伺えます。

昭和塾堂の設計に関しては、名古屋市中区や愛知県庁舎と同様に顧問に佐野利器（としかた）が参加しており、帝冠様式につながる意向が働いたことも考えられます。

予期せぬ美しさ

昭和塾堂には、型にはまらない建物らしい、とっておきの場所があります。

一つは塔屋頂部の静坐室（しやうざしつ）（神殿）です。ここは、上部のアーチ窓がキリスト教の教会堂のドームにのる明り取りのような効果になり、驚くほど明るい空間となっています。まるで仏教と神道とキリスト教が融合したような、とて

知られざる名建築

名古屋には、いまだ文化財の指定も登録もされていない凄（すご）い建築が残っています。その代表格が昭和塾堂です。

かつて織田信長の弟信行の末森城があった、城山八幡宮の境内に、丘陵からはみ出さんばかりの大きな鉄筋コンクリート造の建物がそびえています。

外観は八角塔を中心に建屋が人型に広がっているため、全体像が把握しづらく、また寺院建築風の意匠が施された姿とあわせて、圧倒されるような迫力を感じます。



相輪風の装飾がのる八角塔



荘厳な雰囲気のある洗面所

も神秘的な場所です。

もう一つは地階の風呂や洗面所に通じる廊下です。ここは床にだけカラフルなタイルが乱張り（らんちやう）されていて、半地下の静謐（せいひつ）な光と合わせて、言葉にできない美しい空間となっています。

現在、昭和塾堂

は、保存について岐路に立たされています。

ただこの謎めいた建物が、忘却された建物、忘れられた建物、つづける時代の唯一無二の建築であることは、もっと知られていいと思います。



乱張りされたタイル



洋風のシンボル

2000年以上の歴史を持つ西洋建築史では様式建築が洗練を極めた。
明治以降の日本はその輸入に邁進したが、50年を過ぎた頃には
習得の難しさを痛感し、新しい様式の探求に乗り換えたという。
後に近代建築の巨匠となった建築家たちの、偽らざる気持ちである。

photo: Hitoshi Kumamoto

column

帝冠様式



【時代の気分とイデオロギーが生んだデザイン】

本章でたびたび登場する帝冠様式とは、その実、明確なデザインボキャブラリーを持つ様式というわけではありません。戦後、洋風のビルに和風の屋根をのせた建物を帝冠様式と称して批判したことから、広く認識されました。

言葉としての発祥は、大正7年に実施された国会議事堂のコンペ案に異議を申し立てた秋田出身の建築家下田菊太郎が、ギリシア建築の神殿のような建物に紫宸殿をのせたような案を発表し「帝冠併合式」と称したことに始まります。

下田の案は、和洋折衷のデザインを模索していた建築史家の伊東忠太からは無視されましたが、その後昭和初期になって陸軍の台頭とナショナリズムの高まりを受け、にわかに脚光を浴びます。その背景には、各地の行政機関に顧問として招かれた佐野利器の暗躍があったとも噂されます。

「建築大辞典」によれば、帝冠様式は昭和5年から15年ごろのもののみを指すとありますが、代表作の神奈川県庁は昭和塾堂と同じく昭和3年に建設され、明確な指標とはいえません。

ただ、そういった政治色や当時の社会的な気分が、帝冠様式を生み出す背景にあったことは、忘れてはならない時代の姿といえるのです。



photo: Taro Igarashi



壁面は洋風、屋根は和風の外観。一番目につく唐破風には龍や鳳凰を配して和風を強調している

こ ゆみ 小弓の庄(旧加茂郡銀行羽黒支店)

洋風建築への憧れ、かつての文明開化のシンボル



唐破風のディテール。入り口扉が重厚

不思議なたたずまい

名鉄小牧線の羽黒駅のすぐそばに、洋風にも和風にも見える不思議な建物があります。

愛称を「小弓の庄」といい、以前は旧稲置街道沿いになつていた加茂郡銀行羽黒支店だった建物です。小弓の庄という名前は移築に際して公募されたもので、かつてこのあたりが藤原氏の荘園で、小弓庄と呼ばれていたことにちなみます。

変転の歴史

加茂郡銀行羽黒支店がたてられた頃の明治後期の羽黒村は、農業と養蚕が盛んで、名古屋と犬山をつなぐ旧稲置街道沿いには、町家が立ち並び、建物はそんな町並みから少しセトバックされて軒を連ねていました。

明治後期の擬洋風建築

また銀行業としては、大正から昭和にかけて吸収合併を重ね、昭和5年に廃店。建物は近隣の住民の手に渡り、住宅に転用されました。その頃、道路の拡幅に合わせて敷地の奥に曳家され、戦中は愛北病院羽黒診療所として使用されたといえます。

平成になって取り壊しの話が持ち上がり、と、地元住民から保存の声が上がリ、犬山市がひき取って、解体後に現在地へ移築され復原に至りました。

その一方で、入口に突き出した唐破風の鬼瓦には龍がのり、その下の欄間には鳳凰が彫刻されていて、和風のディテールが目をはきまます。

このような和風と洋風が混じり合った建物は、明治初頭に建てられた擬洋風建築に似ています。ただそれら擬洋風建築は大工が西洋建築を模して作ったため、奇妙なデザインが多いのですが、小弓の庄はそれぞれの装飾がところをわきまえ、違和感なくまとまっています。

また内部の吹き抜けには、開閉のための回廊が巡っています。この形式は当時の銀行でよく用いられた構成です。2階の正面には大きな欄間の装飾がリズムカルに配置され、奥の座敷の存在が暗示されています。

以前はホールにカウンターがありましたが、復原の際に改築され、地元の情報交換の場として本棚やラックなどが置かれています。



吹き抜けから2階座敷の欄間を見る

残されたシンボル

小弓の庄は、まちの人たちの活動の場とするため、犬山市がまちづくり拠点施設第一号として建物を保存・復原しました。

かつて江戸風情のある街道沿いを賑やかせた銀行が地域に馴染み、文化施設として生まれ変わって愛される。そんな望ましい建築文化が、この場所でひっそりと継続されています。



2階座敷。立派な床の間を構えている

明治40年頃
木造二階建て
犬山市大字羽黒字古市場53-1
www.city.nagano.aichi.jp/shitsu/kouyosetsu/1001492/1001670



photo:Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

愛嬌のある外観。棟先が切り落とされたことで洋風の腰折屋根に見える。左隣に現在の郵便局が隣接する

野間郵便局旧局舎

まちの思い出を抱えた、愛嬌のある洋館の郵便局

野間の歴史

野間郵便局旧局舎の脇を通る細い路地を進むと、すぐ近くに野間海岸が迫り、その手前には南北へまっすぐ通る魅力的な道があります。かつてはこの道がまちのメインストリートで、道沿いには海水浴場や映画館、村役場があり、野間郵便局もそこに面して開局していました。

昭和6年に国道247号が通ると、それに



事務室内の観。窓から明るい光が指す

和洋折衷の郵便局

この建物は、裏手側が和風の建物となっている点も特色です。構造的にも両者は分かれています。洋館はトラス構造、裏側は和小屋になっています。

また海が近いため基礎が高く、玄関では扉の棧が下構成されていて、郵便局らしい遊び心のあるディテールとなっています。

扉を開けると広々とした事務室があり、手前にはカウンターが当時のまま残されています。入口のそばには公衆電話の個室と局長室があり、木製の建具が上げ下げ窓からの光を受けて美しいです。

現在、事務室は市民の文化活動の拠点として活用され、寄席やコンサートなどにも使用されています。

受け継がれる遺産

野間郵便局旧局舎の特徴は、建物がほぼ当時の姿を保っていることにあります。それは、現在でも森田家の人々が管理し、施工した大工の弟子が面倒を見続けていることと深く結びついています。

また局舎には膨大な資料や郵便局の道具類が保管されています。今ではすっかり様子を变えた野間にとって、これらの資料は建物とあわせて、まちの歴史を伝えるかけがえのない財産です。



展示された資料。今では貴重なまちの記録

町並みに溶け込む洋館

知多半島を周回する国道247号を南下すると、名刹野間大坊の程近くの商店街に溶け込んだ、味わい深い洋館があります。

外壁は水色の下見板張り、半切妻屋根にはスレートが斜めに葺かれ、先の尖った棟飾りと小さな屋根窓がふたつ付いています。ファサードが非対称なものも愛嬌。手前には昔ながらの赤いポストがちょこんと鎮座し、彩りを添えています。

この建物の外観は、三代目局長の森田定吉が設計したと伝わっています。不慣れな手つきで洋館をデザインした姿が、ありふれた建材で建てられた洋館に独特の味わいを与えています。



脇の路地。すぐ先に野間海岸が迫る

昭和6年頃
木造2階建て
〔外観設計〕森田定吉〔大工〕杉村定次郎
知多郡美浜町大字野間字須賀91-1

重要文化財 名古屋市市政資料館(旧名古屋控訴院)

名古屋の近代建築保存のターニングポイントになった傑作



photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

ドームを頂く中央部と両脇の角屋、それをつなぐ翼廊が見事に調和した外観



木造のドーム。西洋建築では宇宙や真理をあらわす

まちのシンボル

名古屋には、まちのシンボルともいえる素晴らしい様式建築があります。それが名古屋市政資料館です。この建物は、もとは控訴院（現在の高等裁判所）の庁舎でした。

明治以降の日本は、まちを形成する建物を西洋建築に倣^{なま}って建てました。また、その中でも洗練された様式建築の習得は、明治時代を通じて日本の建築界の最重要の課題でした。

名古屋控訴院などの裁判所を設計した司法省（現在の法務省）では、大日本帝国憲法の策定にあたりドイツ圏の憲法を参照したた

め、ドイツのネオ・バロック様式に基づいてデザインされました。

様式建築の到達点

様式建築でとりわけ重要になるのが外観です。中でも、ギリシア建築に端を発する、柱と梁とペディメント（破風）からなるデザインモチーフは、ローマ建築からルネサンス建築へと受け継がれ、世界中に広がりました。この系列は古典主義様式ともいいます。またその対になるのが、中世のフランスやドイツで登場

したゴシック様式です。

名古屋市政資料館の外観は、白い柱と赤いレンガ風タイルで構成されています。白い柱が古典主義様式、赤いレンガ風タイルがゴシック様式に由来するもので、ドイツの傾向が現れています。

また、中央の車寄せの円柱と、壁面に並ぶ角柱、角屋の厚い角柱とは立体感が異なり、この差が外観に陰影による変化を生み出しています。

車寄せの上にあるドームは宇宙や真理をあらわし、ここを頂点として全体の造形がまとめ上げられています。このような造形力が、古典主義様式の最大の見どころです。

保存への物語

そんな造形美を誇る名古屋市政資料館ですが、昭和40年代から50年代にかけて取り壊しの危機に瀕したことがありました。

これを救ったのが名古屋市の若い職員たちでした。彼らは建物の価値を詳らかにした研究レポートを作成して、建築史家飯田喜四郎の協力を仰ぎ、保存の道を探りました。また、その活動はメディアを通じて一般の人々の支持を集めました。



メインフロアの大階段と吹き抜け

そして、粘り強い交渉と知恵を絞った調整が実り、建物の保存が決まりました。また、その後の活用については、重要文化財の指定箇所を限定することで、市民に開かれた建物へと生まれ変わりました。

名古屋市政資料館の保存に関わった職員たちは、ここを足掛かりにして多くの文化財建造物や町並みの保存と活用に携わり、成果を上げていきました。後に続くそれら保存の物語もあわせて見ると、この建物がひととき重要な意味を持つて感じられます。



古典主義様式のファサード。白い花崗岩の複雑な加工には職人がとても苦労したという逸話が残る

岡崎信用金庫資料館(旧岡崎銀行本店)

名建築家鈴木禎次が手がけた、古典主義様式の華やかな銀行

岡崎銀行本店略歴

岡崎信用金庫資料館は、元は岡崎地方で最大の金融機関だった岡崎銀行の本店として建てられました。

明治以降、岡崎は生糸や綿花、養蚕^{まよう蚕}、紡績など繊維産業が発展し、それに合わせて金融機関が求められました。明治23年、岡崎の初代町長深田三太夫をはじめ、14人の財界人が発起人となって設立されたのが岡崎銀行でした。

その本社ビル設計に選ばれた鈴木禎次は、三井銀行の建築係を経て、名古屋でも多くの銀行建築を手がけたスペシャリストでした。

様式からの逸脱

この建物は旧東海道が折れ曲がる角地にたち、南側が正面のファサードとなっています。その正面は三つの部分に分かれ、中心の入り口上部にはドリス式の円柱が太い梁を支え、その上に櫛形^{くしがた}のペディメント^{じやうた}がある古典主義様式のデザインとなっています。

また両側に伸びる塔状の屋根はそれぞれ違うかたちになっていて、窓の数や大きさ、その周りにあしらわれた装飾も、左右で全く異なります。

残された外観

この破調ともいえるデザインは、アールデコやセセッションなど海外の新しい様式を取り入れたものと考えられます。その頃の鈴木禎次は、名古屋や大阪でも同じ手法で銀行建築を設計していて、新旧の様式を折衷しながらデザインを模索していた様子が伺えます。

華やかな外観を残す一方、この建物は、昭和20年の空襲で内部空間を全て失っています。かつて館内を彩った大理石のカウンターや木調の美しい内装は、竣工記念の絵葉書にしか残されていません。

また、岡崎信用金庫が資料館として保存・活用するにあたり、鉄筋コンクリートで補強



紙幣や金融の歴史的資料が展示された2階

名古屋の名建築家

いまも江戸時代の入り組んだ町割りを残す岡崎の中心市街地に、名古屋を拠点に活躍した建築家鈴木禎次^{しんじ}の作品が残されています。国道1号から籠田公園^{かた}へ向かう中央緑道の途中に見える、赤いレンガと白い御影石で構成された華やかな外観の建物が、岡崎信用金庫資料館です。

鈴木禎次は、明治の終わりから昭和にかけて変化を遂げる建築界で、様式建築からモダン建築まで幅広く対応できた建築家でした。この建物はその過渡期に位置付けられます。



中央2層部分に配されたドリス式円柱



建築家鈴木禎次の卒業設計のパス

1917年(大正6年)レンガ造(一部石造)2階建て
〔設計〕鈴木禎次
岡崎市伝馬通1-58
<https://www.okazaki.co.jp/local/museum/>



旧街道沿いの町並みに溶け込む外観。角地を逆手にとった古典主義様式の構成が巧み

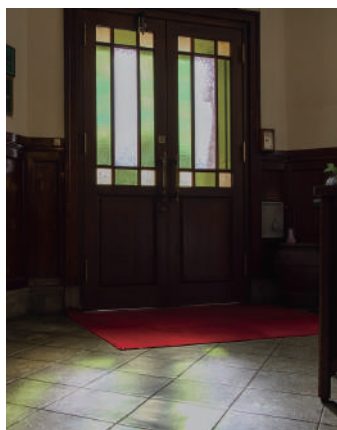
大野宿 鳳来館(旧大野銀行本店)

山間部の旧街道沿いに佇む、美しいレトロ建築

創建から保存まで

鳳来館の前身の大野銀行が創業したのは明治29年のことで、その頃の大野は生糸業と林業で発展しました。また大正12年には私鉄鳳来寺鉄道(現JR飯田線)が開通し、三河大野駅と大野宿の間に大野橋が架けられて別所街道と繋がり、その角地に大野銀行本店が新築されました。

戦後、大野銀行は東海銀行(現三菱UFJ銀行)に吸収合併され、建物は東三信用組合や豊川信用金庫を経て平成17年に閉鎖されました。その際に建物の保存が検討され、地元縁の深い株式会社スエヒロ産業が手を差し伸べ、喫茶店とギャラリーを併用した鳳来館の開館に繋がりました。



ステンドグラスの光が美しいカフェ

鉄筋コンクリート造の古典主義様式

鳳来館を訪れると、旧街道に馴染んだたずまいに思わず見惚れてしまいます。角地にピッタリ収まり、南面した建物が明るい表情を見せているからです。

敷地に合わせてカーブした壁面には1階と2階を繋ぐ柱が並び、深い軒先と合わせて古典主義様式らしい姿となっていますが、よく見ると柱間が不規則で幅もまばらになっています。これはコーナーの入り口や窓の配置のずれを柱の構成で調整した、巧みなデザインです。

少し格式ばった入り口から館内へ入ると、木調の内装が美しいカフェが迎えてくれます。目の前には立派なカウンターがあり、3本のドリス式の円柱が立っています。これは銀行だった頃の名残で、林業で栄えたまちらしい設えです。

また、窓に嵌められた薄い緑色のステンドグラスが館内に幻想的な光を引き込み、カップやグラス、コーヒーサイフォンや美術品などの置物を美しく彩っています。

不思議の国の鳳来館

2階のギャラリーでは、大野宿を紹介したパネルや美術品などが展示され、また企画展

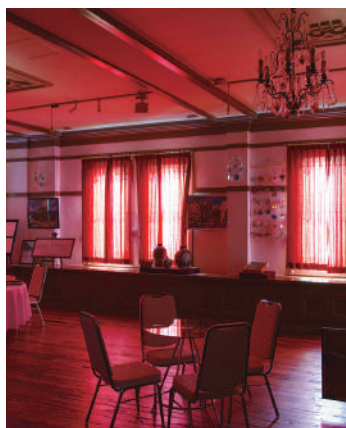


南側の外観。柱間や柱の幅に注目

奥三河のレトロ建築

建物は所有者が変わることで、より魅力的な建築になることがあります。鳳来館は、新しい所有者の手で銀行建築から幻想的なレトロ建築へと生まれ変わった、素敵な建物です。鳳来館のある新城市の大野宿は、秋葉山と鳳来寺山を結ぶ秋葉街道鳳来寺道が通る交通の要所で、明治の初期には東栄町別所から豊橋へ通じる別所街道が整備され、山間部でありながら早くから産業が栄えました。

やイベントにも利用されています。別室には竹久夢二の展示や、木調の上質な設えの旧店長室が残されています。そのいずれもが、窓から差し込む光で輝いて見えます。山間の静かな旧街道にある洋館に入ると、そこでは美味しいコーヒーや食事が提供され、館内には美術品や置物が溢れる。まるで童話の中に迷い込んだような経験をできるのが、鳳来館の魅力です。一度行ったら忘れない、唯一無一のレトロ建築です。



赤いカーテンが幻想的な2階ギャラリー

1927年(大正14年)

鉄筋コンクリート造2階建て(屋根及び2階床は木造)

〔設計〕志水建築事務所(篠田進)

新城市大野上野17-2

<http://hokraikan.suehiro-i.com/guide/index.htm>

登録文化財で昼食を

素敵な建物で美味しい食事をいただくのは、豊かな時間を過ごせる最高の贅沢といえるでしょう。
ここではその中でも、登録文化財の建物と一緒に飲食を楽しめるスポットをご紹介します。



蒲郡クラシックホテルのシーフードカレー。香ばしく焼かれた魚介とカレーのハーモニーが素晴らしい



レストランの内装。オリジナルの設えを残す

蒲郡クラシックホテルのシーフードカレーと 伝統のビーフカツレツ

最初にご紹介するのが、蒲郡クラシックホテルの2階にあるレストランのシーフードカレーです。

三河湾を見下ろす絶好のロケーションにあるフレンチレストランは、建設当初の設えが残され、とりわけ前面に迫り出したベランダ席は、目の前にパノラマが広がる贅沢な席になっています。

ホテル内のレストランということもあり、値段は少し高めですが、ランチではお手頃な価格で本格フレンチを楽しむことができます。おすすめはランチ限定のカレーセットで、ビーフ、シーフード、野菜、透明カレーから選



伝統のビーフカツレツ

間も無く口の中で肉の味が爆発します。あまりの旨さに我を忘れること請け合いです。

鳳来館の信州長屋門謹製ポーク照焼重

もう一つは、大野宿鳳来館で提供される、信州長屋門謹製ポーク照焼重です。カフェのイメージが強い鳳来館ですが、食事も美味しく、名物のカレーや栗豚丼をはじめ、5種類の



鳳来館の信州長屋門謹製 SPF ポーク照焼重

パンが楽しめるコーヒー付きのランチも人気です。



サイフォンコーヒーのある風景

なかでも、数量限定の信州長屋門謹製ポーク照焼重は、旨味の強いSPF（特定病原菌不在）ポークのバラ肉を焼いて甘辛いタレに絡めたもので、豚の旨味がタレと絡む濃厚な味わいは絶品です。敷き詰められたご飯と一緒にかつこむと、思わず唸り声上がるほどの美味しさです。また傍に添えられた桑の葉うどんは、こってりした口を落ち着かせてくれる名脇役です。

食事を終えた後は、サイフォンで丁寧に淹れられたコーヒーと共に、暖かい光に満たされた店内でゆったりとした時間に身を委ねる。まさに至福のひと時です。

ぶことができ、バリエーションも豊かです。
なかでもシーフードカレーは、オーブンで焼かれたエビや帆立、ポアレされた季節の魚などがふんだんに盛り付けられています。香ばしい魚介を味わいつつカレーを頬張ると、深みとコク、ほのかな甘みにピリッとスパイスの効いた芳醇な味わいが、口一杯に広がります。またカレーのルウには隠し味で帆立の貝柱が入っていて、魚介との間を上手に取り持っています。
もうひとつの名物が伝統のビーフカツレツです。池波正太郎が愛したレシビを聞き取り調査などを重ねて復活させた逸品です。薄めにパン粉をつけて焼き上げた分厚いフィレ肉を特製のソースと一緒にいただく、咀嚼する



photo: Akihiko Mizuno

朝日に輝くファサード。周囲の建物より一回り大きな外観が古い町並みの中でひととき目を引く

津島市観光交流センター（旧津島信用金庫本店）

観光交流センターに転用された、旧街道沿いの銀行建築



古い町並みを残す津島上街道

実寸大の巻藁がある風景

宵闇の水面に浮かぶ巻藁船が幻想的な尾張津島天王祭。600年の歴史をもつ祭礼は、ユネスコ無形文化遺産に登録され、全国でも指折りの華やかな夏祭りとして知られています。

その巻藁の実寸大の模型を間近に見られるのが、天王祭をはじめ歴史ある津島の情報を発信している、津島市観光交流センターです。この建物は、曲がりくねった津島上街道に軒を連ね、かつては銀行建築として古い町並みの中でも目立った存在でした。

市民団体の保存活動

この建物は、津島の繊維産業の発展を担った名古屋銀行（東海銀行の前身）の津島支店として、昭和4年に建てられました。設計は、

されているのも見どころです。

朝日に輝くまわりのシンボル

この建物を見に行くなら朝がおすすです。澄んだ空気の中、古い町並みを歩いていると、朝日を浴びてキラキラ輝く姿がとても美しいからです。

津島市観光交流センターには、午前中から地元の人や観光客が気軽に訪れ、思い思いの時間を過ごしています。魅力ある活用がなされている、素敵な建築です。



銀行時代の名残の立派な金庫



行燈のように館内を照らす巻藁

名古屋銀行に在籍していた坂野鋭男で、学生時代に鈴木禎次に教えを受けた一人でした。戦後になると、東海銀行津島支店を経て、津島信用金庫として使用されましたが、平成15年にいちい信用金庫との合併の際に取り壊しの話が持ち上がります。

その時に声を上げたのが地元の人々で、彼らの強い思いを受けた津島市が寄贈を願い出て、保存が決められました。また建物にまつわる都市再生整備計画では、市民グループの天

王文化塾や地域住民などが参加して検討を重ね、平成21年に観光交流センターとして生まれ変わりました。

鉄筋コンクリートの銀行

建物のたつ場所は旧街道に直行する天王通りから少し入ったところにあり、大通りからもその姿が確認できます。

またファサードは、全体がフレーム状の枠で構成されていて、それが下部の花崗岩まで徹底されています。そこに軒下の装飾や入り口のペアカラム（双柱）など様式建築的な装飾が付いています。

少し引き込んだ入り口から入ると、内部には大きな吹き抜け空間が広がっています。中央には2本の円柱が立ち上がり、壁面の角柱と比べて、社寺建築のような空間の差異化が感じられます。

賑やかな館内できれいな目を引くのが、天井まで届きそうな巻藁の実寸大模型です。天王祭では限られた人しか見られない巻藁の内側の光景が体験できる、面白いインテリアとなっています。

また正面奥には銀行だった当時の金庫が残り、吹き抜け上方を巡るギャラリが復元

1929年（昭和4年）

鉄筋コンクリート造2階建て

津島市本町1丁目52-1

【設計】坂野鋭男

<http://nc-ppp.com/tsushimashikankou/>

新しいシンボル

鉄骨造や鉄筋コンクリート造による大スパンの建物には組積造に基づく様式建築はそぐわなかった。

新しい建物にふさわしいデザインが追求されたのは、用・強・美を本質とする建築にとってごく当たり前の進歩だった。

photo: Hitoshi Kumamoto



column

建築家 鈴木禎次

【名古屋をつくった建築家】

明治後期から昭和初期にかけて、名古屋で活躍した建築家鈴木禎次は、明治3年に静岡県静岡市で生まれました。帝国大学の造家学科（現在の東京大学建築学科）では辰野金吾の教えを受け、大学卒業後は三井銀行の建築係に就職しました。

また鈴木の子と夏目漱石の子が姉妹だったことも有名で、漱石の日記にたびたび登場しています。鈴木は漱石の死後に、墓石のデザインも手がけています。

明治38年に名古屋高等工業学校（現在の名古屋工業大学）の教授になると、建築家としての辣腕を振るい、広小路通沿いなどに多くの建物を設計しますが、当初は名古屋があまりに田舎だったため、ずいぶん落ち込んだそうです。

名古屋の財界人にとっても本格的な建築家は得難い人材で、特にいとう呉服店（現在の松坂屋）の伊藤次郎左衛門祐民との関係は深く、「いとう呉服店」や「伊藤銀行」、「松坂屋本店」などを手がけています。

そうした大きい建物を設計する一方で、印象深い住宅作品も残しています。半田の「旧中埜家住宅」は、まだ四十代だった鈴木が手探りで設計した住宅で、繊細なベランダが美しいユニークな作品です。

また名古屋市覚王山にある伊藤家別邸の揚輝荘内の「伴華楼」では、尾張徳川家の建物の移築と増築を手がけています。

現存する建物は少なくなりましたが、鈴木禎次の建築は今も変わらず愛知県のまちのシンボルとして愛されています。



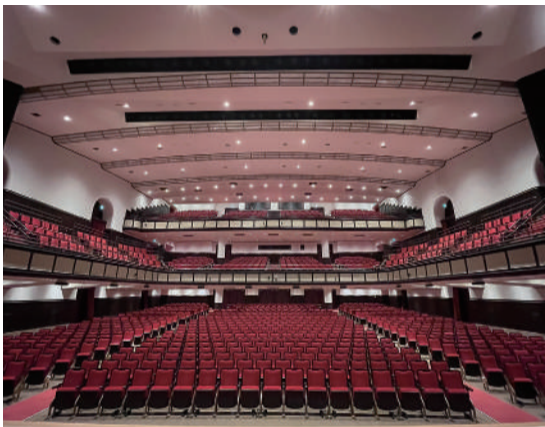


photo:Hitoshi Kumamoto

堂々とした表現主義的な外観。以前の底は鉄製だったが戦中に供出され、昭和30年の増改築の際に取り付けられた

名古屋市公会堂

鶴舞公園に堂々とたたずむ、名古屋近代建築を代表する文化の殿堂



舞台との距離感が近く臨場感のある大ホール

「大きさ」という特徴

名古屋市の鶴舞公園には大きな塊のような公会堂があります。焦茶色のタイルで覆われ、窓は小さく、コーナーには丸みがつけられているため、よりいっそうボリューム感が強調されています。

名古屋市公会堂は、昭和5年に竣工して以降、講演会や催事、音楽イベントなどに活用され続けてきた、名古屋を代表する近代建築です。

当初のデザインが復元されました。

また最新の音響設備やデジタルシネマプロジェクターを取り入れ、現在のライブや映像の上映にも対応しています。その一方で、舞台にある湾曲した壁面「クッペルホルゾン」はそのまま残されました。

建設から長い年月が経ち、戦禍や米軍の接収にも耐えてきた名古屋市公会堂は、今も変わらず名古屋の文化を支えています。その揺るぎもない堂々とした姿に、敬意を払わずにはいられません。

また建物の特徴である大きさは、鉄骨造や鉄筋コンクリート造の発達で可能になった近代建築の技術です。名古屋市公会堂には建設当時2700人を収容できる大ホールがあり、これは同時期の日比谷公会堂や大阪中央公会堂に比肩する大きさで、延べ床面積では両者を凌駕しています。

市民の寄付で建てられた公会堂

名古屋市公会堂の建設は、昭和天皇の御成婚記念事業に端を発します。その当時、公会堂の建設は各地で求められ、また名古屋は人口が100万人に迫り、中川運河の開削や上下水道設備の拡張など、まちが大きく変革した時代でもありました。

その影響で、市の予算だけでは建設費が賄えず、市民による寄付を募った結果、完成までに7年を要しました。昭和3年に鶴舞公園で開催された御大典奉祝名古屋博覧会の時には、鉄骨が剥き出しの状態だったといえます。

表現主義的なデザインとタイル

昭和初期の名古屋では、セセッションやドイツ表現主義のデザインが参考にされたといわれています。名古屋市公会堂は後者の代表

作で、全体を

大きな塊のようにつかひ、またアーチを多用するなど曲線を取り入れている点も表現主義に倣っています。

一方、内部空間では、大



3階の和室。普通の和室よりスケールが大きい

ホールのほか2階の集会室（旧婦人室）や3階の和室、4階の特別室などバリエーション豊かな部屋が用意され、市民の要望に応えられる機能が備えられました。

その中でも魅力的なのが館内をめぐる廊下です。とりわけ大ホール前の幾何学模様で敷かれたモザイクタイルが美しいです。それらタイルに、階段やバルコニーの窓からの光が染み渡り、荘厳な雰囲気を漂わせています。

名古屋の文化の殿堂

平成31年、名古屋市公会堂は、耐震補強などと合わせて大ホールの改修を行いました。座席数を減らしてゆとりを持たせ、椅子は



大ホール前のモザイクタイル

1930年（昭和5年）

鉄骨鉄筋コンクリート造4階建て、地下1階

設計 名古屋市建築課

名古屋市中区鶴舞1丁目1-3

<https://nagoyashi-kokaido-hall.info/jp>

国登録記念物 鶴舞公園

歴史的な博覧会が開かれた、名古屋市営第一号の都市公園



photo:Hitoshi Kumamoto/Ryota Murase/Tomio Ishida/Akihiko Mizuno

噴水塔遠景。右手側が正門、左手側に和風庭園がある。土日には催し物が開かれ多くの市民で賑わう

博覧会と公園の整備

鶴舞公園の造営は、明治43年に開催された第十回関西府県連合共進会の会場整備に合わせて進められました。それは、この辺り一帯が田んぼの多い湿地帯で、ちょうど明治38年から開削が進んでいた新堀川の土砂を埋め立てに利用できたからです。

ちなみに共進会とは、産業の発展と交流を図るために設けられた製品を品評する会で、明治政府の殖産興業の一環で開催されました。



平成9年に復元された奏楽堂。創建時は木造だった

共進会の終了後、日本の「公園の父」といわれる造園家の本多静六と鈴木禎次の設計で進められ、起伏の少ない西側を幾何学的な近世フランス式の回遊式庭園に、東側は緩やかな丘陵を活かした和風の庭園に整備されました。

鈴木禎次の最高傑作

公園の中には、共進会の折に建てられた噴水塔と奏楽堂の二つの建物が残されています。両方とも鈴木禎次の設計によりですが、奏楽堂は平成9年に復元されたものです。その内の噴水塔は、数ある鈴木建築の中でも最高傑作と呼べるもので、古典主義様式の構成が美しい作品です。よく晴れた日には、頂部の水盤から八方向に注がれる水が軒先に当たって飛散し、円形の塔の白いドリスオーダーと内部の空間をキラキラと輝かせて、まるで神殿のような姿を見せてくれます。

歴史ある公園と新しい憩いの場

鶴舞公園内には他にも、名古屋博覧会の時に建てられた鶴々亭や普選記念壇があり、南東部には国指定史跡の八幡山古墳もあります。また、100年の歴史を重ねてきた鶴舞

名古屋の近代化のシンボル

名古屋にはまちの近代化の象徴とも称される公園があります。それが鶴舞公園です。明治42年に造営された鶴舞公園は、名古屋市の最初の公園というだけでなく、関西府県連合共進会と御大典奉祝名古屋博覧会という2つの重要な博覧会が開催された会場でもありました。

公園の設計に携わった建築家の鈴木禎次は、後にこれら博覧会が名古屋が発展を遂げるターニングポイントになったと述懐しています。

現在、鶴舞公園はそのような歴史的背景から、国の登録有形文化財記念物となっています。



午後の光を受けて輝く噴水塔

中央図書館や、かつては名古屋で最初の動物園も開園されていました。

名古屋市民公会堂とあわせて名古屋の文化を担ってきた鶴舞公園は、近年「Park+M」を導入した再整備も行われています。歴史ある景観を残しつつ、飲食店など時代のニーズを取り入れた新しい市民の憩いの場として、今後も発展し続けていきます。



新しく整備された TSURUMA GARDEN area1



photo: Hitoshi Kumamoto

印象的な外観。両脇の角屋の存在がファサードを引き立たせる。モダンな窓枠も美しい

豊橋市公会堂

路面電車沿いに悠然と構える、豊橋のシンボルの近代建築

公会堂ができるまで

大正の終わり頃、全国各地で討論会や講演会が行える公会堂の建設が求められました。そんな折、豊橋市では地元の豊橋電気株式会社と名古屋電灯株式会社の間で合併の話が持ち上がり、市議会を巻き込んだ論争へと発展しました。結局両者の折り合いがつかず、知事の仲裁で名古屋電灯が公会堂を寄付することが提案されました。

その後、公会堂建設は市会騒乱事件で収縮しますが、昭和3年に御大典奉祝記念事業として再燃し、豊橋市制25周年記念で完成に至りました。

まちの顔としてのファサード

かつて路面電車は豊橋市公会堂の正面から迫り、ファサードがビスタ（景観の目印）のような役割を果たしていました。

大階段を上った先の玄関には、天井にクロスヴォールトが架かり、列柱と合わせてアーケードのような空間となっています。

この建物は仕様書に「近世式」と記されていますが、ドームや軒下のアーチの連続する装飾など、ロマネスク様式やスパニッシュ様式の意匠も散見できます。

設計者の中

村與資平は浜松を拠点に活躍した人物で、様式建築に精通し、静岡市庁舎や静岡県庁舎も手がけた、地元が誇る名建築家です。

その手腕は

内部空間にも発揮されています。塔屋内を巡る手すりの美しい螺旋階段や、その横の円形窓から眺められるアーケードと列柱の造形も見事です。



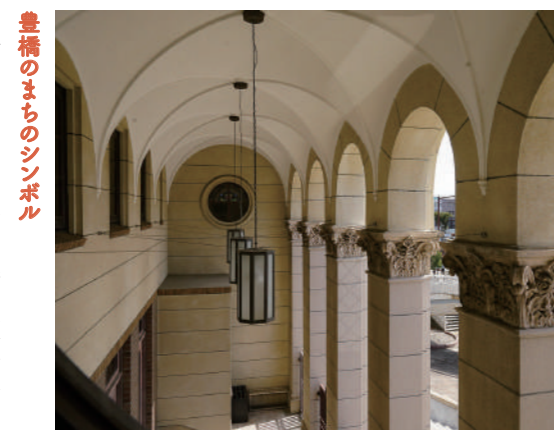
ホール全景。舞台上の照明器具は垂で上げ下げする

隠れた見どころは、ホールの奥にある3階の楽屋です。角部屋のため窓が多く、演者用の大鏡がそれを写し込んで不思議な空間となっています。

また昭和天皇が訪れた3階の貴賓室も重厚な内装が残されています。

鷺の謎

ところで豊橋市公会堂の鷺に関しては謎があります。かつて背後にある吉田城跡に



円形窓から覗いたドリス式列柱とクロスヴォールトの眺め

豊橋のまちのシンボル

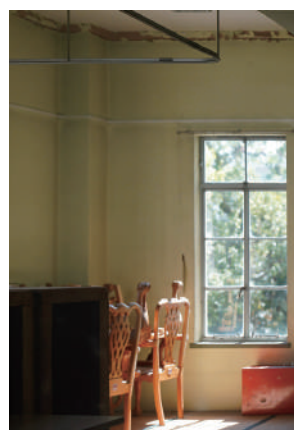
路面電車の走る豊橋の市街地で、沿線にひととき目を引く立派な建物があります。正面には大きな階段がそびえ、その先にはコリント式の柱頭を持つ角柱が立ち並んでいます。また頭上には左右に二つイスラム風のドームをいただき、その四隅には鷺が翼を広げています。

豊橋市公会堂は、まちのシンボルとして愛され続けている名建築です。

は陸軍歩兵第18連隊が置かれていたことから、軍都の象徴だと囁かれていました。その一方で、鷺は陸軍の紋章ではないため、否定する意見もあります。

紋章でいえば、鷺は羽毛の形状から黒鷺と考えられ、それはロマノフ王朝の紋章を想起させます。豊橋には豊橋ハリストス正教会聖堂があり、日露戦争後にロシア人捕虜が多く移されていました。鷺が象徴的に据えられているのは、その辺りに秘密があるかもしれません。

それら歴史の謎への探究は、まちのシンボルならではの醍醐味といえるでしょう。



不思議な雰囲気漂う3階の楽屋

1931年（昭和6年）
鉄筋コンクリート造3階建て
「設計」中村與資平
豊橋市八町通2丁目22
<https://www.bunzai.co.jp/publicna/>



光源のある灯室

岸を走る国道274号から20 m程度しか離れておらず、また基礎部が2 mほど岩礁から高くなっているため、地上から立ち上がっているように見えます。

そして美しいフォルムも特徴的です。高さ19 mのすらりとした白い姿は、下から上に向かって徐々に細くなり、その艶かしいラインは、ギリシア建築のイオニア式オーダーの円柱のような美しさを感じられます。

灯塔の上には踊場が巡り、光源のある灯室がちよこんとついている姿も愛嬌があります。このような美しいフォルムの灯台が空と海を背景にたつ姿は、他の建造物にはない感動を与えてくれます。

夕日の沈む絶景

基礎部の階段をあがり、暗闇の中の螺旋階段を丸窓の光を頼りに上へと登ると、狭い入り口の先に灯室があります。中心には灯器が置かれ、下部の出口から這い出れば、目の前に広がる絶景に思わず息を吞みます。海岸にたつ

美浜まちらボと登れる化プロジェクト

野間埼灯台は、この辺りが人気の海水浴場だったこともあり、建設当初から観光名所として知られていました。その頃は常駐していた灯台守が塔内へ登らせてくれたといえます。再び登れるようになったのは近年のことで、地元で活動する「美浜まちらボ」の働きかけによりです。彼らは海上保安庁の許可を取ってライトアップを行ったり、灯台前の駐車場でイベントを行ったりして、周知に努めました。また野間埼灯台100年の記念事業として国登録有形文化財への登録を果たし、記念誌も作成しました。

その一環で進められたのが「野間灯台登れる化プロジェクト」でした。メンバーたちの粘り強い活動と熱い思いが結実して、2022年から一般公開され、土日限定で灯台へ登ることができるようになりました。



灯室と伊勢湾の絶景

灯台ならではの景色です。

もうひとつ紹介したい絶景が夕暮れの野間埼灯台です。背後に広がる伊勢湾に夕日が沈み、そこにたえずむ灯台の姿は美しくてちょっぴり切ないです。

野間埼灯台は、灯台という建造物の良さを十二分に味わうことができる稀有な建築です。

Nomasakitôdai

登録／2022年6月
登録基準／
国土の歴史的景観に
寄与しているもの

1921年(大正10年)
コンクリート造(無筋)
1999年炭素繊維巻立工法にて耐震補強
美浜町大字小野浦字岩成20-1
<https://romance-toudai.uminohi.jp/toudai/nomasaki.html>



灯台の全景。2 mの基礎部から19 mの灯台が伸びる。伊勢湾とたたずむ素晴らしい風景

野間埼灯台

伊勢湾を望む、愛知県最古の美しい灯台

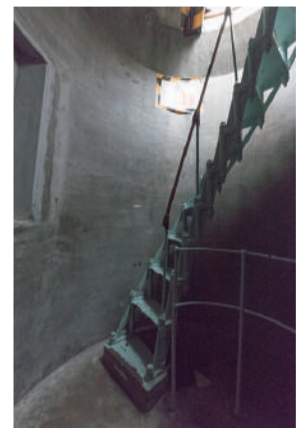
灯台略史

伊勢湾を望む知多半島の西端に、県内で稼働する灯台の中で最も古い野間埼灯台がたっています。海岸からすくと立ち上がる白亜の塔は、背後に広がる水平線と合わせて美しい風景をつくり、とても人気のある観光スポットとなっています。

日本の灯台の歴史は江戸末期に始まりますが、それらは当初、お雇い外国人の手によって設計されました。愛知県には博物館明治村に移築された、フランス人技師ヴェルニーによる国内最古の品川燈台(ともかみ)があります。

野間埼灯台の美

野間埼灯台の魅力の一つが、ロケーションの素晴らしさにあります。灯台のたつ場所は治



塔内部の螺旋階段

重要文化財名古屋テレビ塔

戦後復興のシンボルから、まちの永遠のシンボルへ



photo: Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

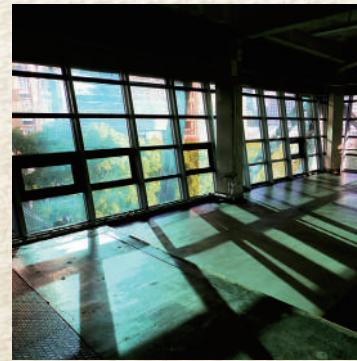
鉄骨で組み上げられた美しいフォルム

復興のシンボル

名古屋の中心を走る久屋大通の真ん中で銀色に輝く名古屋テレビ塔は、戦後復興のシンボルともいえるべき素晴らしい建築です。

戦前の名古屋は、三菱重工業をはじめ軍需産業の一大拠点で、戦火の折には60回以上の空爆を受ける壊滅的な被害を被りました。

そんな荒廃したまちに建設されたのが、新しい大衆文化であるテレビの送信アンテナを集約した名古屋テレビ塔でした。また建設用地に久屋大通公園が選ばれたのは、戦災で焼け落ち



改修前の建屋。予想外の場所から光が差す

た名古屋城に代わる観光名所となることが求められたからでした。

前例のない集約電波塔

名古屋テレビ塔は、建設当時、電波塔としても前例のない建物でした。設計者の内藤多仲は戦前に多くのラジオ塔を手がけたスペシャリストで、その経験をもとに全高180mの自立式鉄塔の設計に挑戦しました。

条件としては、風の影響を受ける高所でのアンテナの固定や、地下鉄が通るため基礎杭



免震工事中の柱の基礎部

が打てないこと、また送信施設を塔体にドッキングさせるなど難しい条件が課せられ、内藤は設計を何度もやり直したといえます。

出来上がったデザインが、頂部まで伸び上がる4本の柱とそれを繋ぐ三角トラス、また柱の基礎同士を地中梁で連結させ、放送施設を低層部に組み込んで交差アーチで支えるなど、構造的に無駄のない現在に見る姿でした。

内藤はデザインの出来栄を、晩年まで満足げに語っていたそうです。

重要文化財への道のり

建設から半世紀以上が経ち、名古屋テレビ塔はアナログ放送の終了を迎え、電波塔としての役割を終えました。その後の活用について、名古屋テレビ塔株式会社と名古屋市、そして日建設計が協議を重ね、新しい文化施設としての転用を目的とした改修工事計画が立てられました。

改修工事でポイントとなったのが、建物のかたちを変えないで耐震性を増す工法の検討でした。10年の試行錯誤を経て、柱を地中スレスレでカットして免震装置を入れる工法が採用されました。

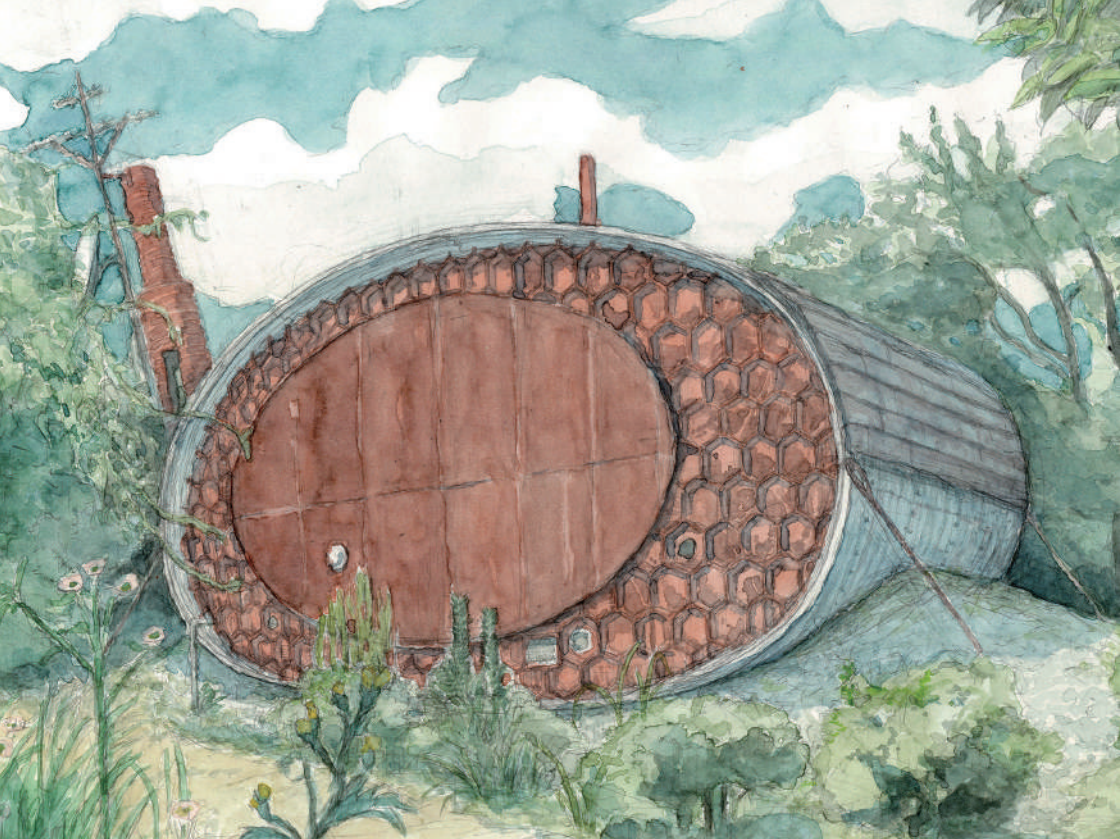
都市空間と共にある姿

工事の際に、同時に行われた久屋大通公園の再整備計画もまた画期的でした。ここでの計画が都市公園法の改正を促し、また民間による公園の管理運営制度「Park+」が採用されたからです。その背景には、かつて愛知県と名古屋市が協力して道路法や都市公園法などの難題を調整した実績が、今も受け継がれているからです。

2022年、名古屋テレビ塔は重要文化財に指定され、その姿が今後も保存されることが決まりました。戦後復興のシンボルは、まちの永遠のシンボルとして生まれ変わったのです。



同時に改修工事した久屋大通公園



あいちのたてもの 博覧会

「あいちのたてもの博覧会(あいたて博)」は、2013年からはじまった、愛知県の魅力ある建物を楽しむイベントです。コンセプトとしては、私たちの身近にある歴史的な建物を特別に公開し、所有者や専門家たちがガイドすることで、その魅力を紹介するというものです。普段は入ることができない美しい空間に浸り、建物の詳細な解説を聞くことでまちの歴史や文化に親しんだとき、何気ない風景が鮮やかに見えてくるはずです。また、以前までの「あいたて博」は登録文化財を公開の対象としてきましたが、記念すべき10回目の開催となった令和5年度からは、重要文化財や未指定の建物も含め、より多くの魅力的な建物を紹介しています。どこか懐かしい気分の味わる、素敵な建築の旅にぜひ参加してみませんか？

※詳細については「あいたて博」のホームページ
(https://www.aichi-tounkai.org/aitate_haku/)
や、SNSなどを「ご覧ください」。また公開する建物については夏頃から順にご案内する予定です。

飯田喜四郎先生 特別インタビュー

帝冠様式に思うこと

今回の冊子のタイトルは「まちのシンボル編」とありますが、そもそもシンボルという定義が難しいですね。つまり、私が思うシンボルとあなたが思うシンボルとは違うからです。

また普通にいえば、シンボルは通常の建物にある属性のようなもので、すべての建物がシンボルになり得る。ですから、まずしっかりとロジックを詰める必要があります。

その上で、まちのシンボルを「そのまちの歴史や文化、あるいは時代を象徴する建物」と定義したことは悪くない着想だと思っています。

冊子で取り上げられている建物を見ると、蒲郡クラシックホテルはやはり面白い形をしていますね。ブルーノ・タウトが最初に泊まった外国人だったというエピソードも面白い。シーフードカレーも美味しそうです(笑)名古屋市役所と愛知県庁舎が並ぶ姿は相変わらず壮観ですね。また、津島観光交流センターの巻藁も面白い

内装だと思っています。

そして、やはり名古屋市政資料館は印象深い建物です。様式建築として良くデザインされていて美しい。ヨーロッパの、例えばパリのルーブル宮殿などに比べるとスケールは落ちますが、それでも良くできていることに変わりはありません。あの建物を残したいといってきた若い名古屋市職員の切羽詰まった表情が、いまだに忘れられません。そんな彼らも鬼籍に入られた人が増えたと聞いて、とても寂しく思います。

今回の冊子で特徴的なのが帝冠様式の扱い方だと思っています。私は以前、名古屋市庁舎と愛知県庁舎を登録文化財にする際に、合同のプロジェクトチームに参加していました。

その際にも話題にのぼったのが、やはり扱いの難しさでした。昭和初期には、建築界の中にも帝国主義に傾倒する人々がいました。戦後にそれを否定する人もいましたが、戦中では肯定す

るのが当たり前だったと思います。ですから、後になってそれらを判断するのは難しいけど、帝冠様式を求めるような空気は確かにあったと思います。

私個人の意見でいえば、これらの建築も残すべきだと思っています。逆に、戦中と戦後に辛い思いをした人々からすれば、壊してしまうべきという意見があるのは承知しています。ただそれはイデオロギーの違いで、建築史の範疇を超えています。感情を超えるというのは難しい。

ただ、そういった意見の衝突も含めて、建物が残っているからこそ分かるものや出来ることも多いと思う。だから私は、建築史家として残すべきだと考えています。



飯田 喜四郎

1924年東京生まれ。名古屋大学名誉教授。東京大学大学院在学中にフランスへ留学。また博物館明治村の館長を長年務めた。

国登録有形文化財とは

平成8年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことです。

それまでは文化財指定制度に基づく重要文化財（その中でも、世界文化の見地から価値の高いものが国宝）が指定され、貴重な建物が手厚く保護されてきましたが、その数は多くなく、急激な都市化の進展などにより、近代の建造物がその建築史的・文化的意義や価値を十分に認識されないまま取り壊される例が相次ぎました。それを決定づけたのが平成7年の阪神・淡路大震災です。震災による被害を受けた多くの未指定文化財が取り壊されてしまいました。

その反省にたち、国レベルで重要なものを厳選する重要文化財指定制度を補い、より緩やかな規制のもとで、幅広く保護していく制度として文化財登録制度が創設されたのです。

登録の基準は、原則として建設後50年を経

過したもののうち、

- ①国土の歴史的景観に寄与しているもの
- ②造形の規範となっているもの
- ③再現することが容易でないもの

のいずれかに該当するものとなっています。

所有者の同意のもとに登録されるもので、登録されると相続税等の減免や保存・活用に必要の修理等の設計監理費などに対する補助を受けることができます。重要文化財と比べると補助は大きくはありませんが、厳しい規制がある指定文化財とは異なり、外観を大きく変えなければ改修や改装も認められており、有効に活用していくことが期待されています。

なお、令和6年3月1日現在、全国で13,761件が登録され、愛知県は553件（全国6位）となっています。



登録文化財のプレート

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは

愛知県内の国登録有形文化財の所有者を中心とする会（略称：愛知登文会）で、登録文化財の保存・活用を推進することを目的に、平成23年6月に設立されました。

平成23年度より文化庁文化芸術振興費補助金を受けて活動を行っており、これまでに登録有形文化財の魅力を体験していただく「あいちのたてもの博覧会」の開催や魅力を紹介する冊子「あいちのたてもの」の制作、文化財の保存活用について学び・意見交換を行うシンポジウムの開催などを行ってきました。そのほか、毎年開催する総会は登録有形文化財を会場にお借りし、その見学もあわせて実施す

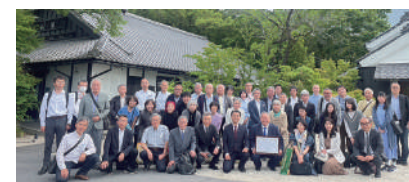
るほか、他府県の登録有形文化財を訪問し、交流を深める視察なども行っています。

令和4年度は文化庁補助金がいただけない年となっており、活動規模の縮小を余儀なくされましたが、令和5年度より新たな実施計画に基づく補助事業が採択され、オンライン登録文化財魅力体験シンポジウムや新規登録文化財訪問、ウィキペディア愛知登文会、文化財魅力発信サポーター育成にも取り組んでいます。

令和元年6月に設立された登録有形文化財全国所有者の会（略称：全国登文会）では他の9つの都府県の所有者の会とともに活動しており、登録文化財の保存活用の輪を大きく広げていくことができると考えています。

当会の活動をご支援いただける賛助会員の入会も募っています。皆さまのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

愛知登文会 会長 小栗宏次



総会での記念写真(令和5年度)

あいちのたてもの まちのシンボル編

2024年3月19日発行

発行者 愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会 <http://www.aichi-tobunkai.org/>
 会長 小栗 宏次
 【事務局】名古屋市中区錦三丁目6番15号先
 名古屋テレビ塔株式会社内 info@aichi-tobunkai.org

編集・企画 株式会社 都市研究所スペース

執筆 はじめに 飯田 喜四郎
 本文 村瀬 良太

写真撮影 水野 晶彦／熊本 仁志／竹内 久生

写真提供 五十嵐 太郎／石田 富男／寛 清澄／村瀬 良太／犬山市

制作協力 寛 清澄

題字 山本 さくら／水谷 月葉

イラスト・構成 村瀬 良太

デザイン 墨 昌宏（有限会社エビスワード）

ページフォロー
お願いします



Facebook

ページフォロー
お願いします



Instagram

友だち追加
お願いします



LINE



本冊子は「令和5年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）」により作成しました。